

## 現代社会における体育教師の生活意識 II

(昭和49年 3 月 20 日受理)

千 原 英 之 進<sup>\*</sup>  
 片 山 昇<sup>\*\*</sup>  
 新 屋 重 彦<sup>\*\*</sup>

1. はじめに
2. データーの説明と問題の限定
3. 体育教師の人生観
  - (イ) 生き甲斐 (ロ) 成功観
4. 体育教師の職業観
  - ① 職業の意味 ② 教師の社会的地位
5. 体育教師の職業観
  - ホワイトカラーとの比較 —
  - (イ) 仕事についての考え方
  - (ロ) 自己の能力の評価
  - (ハ) 理想の仕事と能力の発揮
  - (ニ) 仕事のやりがいと内容
6. 体育教師の社会的役割
 

以上本学紀要 3 号
7. 学校体育と社会体育
8. クラブ観
9. 価値志向
10. スポーツと政治
11. 体育教師の当面する問題
12. 体育教師の使命

## 7. 学校体育と社会体育

表 1. は、学校体育についての考えを次の中から賛成と思われるものを選んで下さい。という問に対する解答である。それによると学校体育を教育の手段とする考え方が 48.4% と約半数の者が支持している。これは単に技術向上や理論的、科学的教養のみに終るべきではないという教育理念をうかがい知ることができる。また、社会体育についてあなたはどのようなお考えですか、という問いに対する解答は表 2 の通りである。ここでは 1 の地域のクラブ活動を通して行う体育運動と答えた者が 39.2% と最高になっている。

この表 1, 2 のパーセンテージは期待通りである。なぜならば学校体育も社会体育も、いわゆる「Physical Education」には相違ないが、原則として学校体育は学校の内部で行なわれるものであり、社会体育は学校以外で行われるものだからである。しかし、学校体育と社会体育はその対象や方法を異に化する

表 1. ( Q 5 )

1. 学校体育は生徒の体をきたえるためのものだから、サッカー、体操などの運動に重点をおくべきだと思う。	13.9%
2. 学校体育は生徒のスポーツ技術向上に重きをおくべきだろうと思う。	9.2
3. 学校体育ではスポーツのプレイを教育の手段としてのみ考えるべきだと思う。	48.4
4. 学校体育ではスポーツを理論的・科学的に教えるだけで良く、実際のプレイは市や町のスポーツクラブでした方が良いと思う。	9.2
5. その他	19.3

※ 社会科学研究室

\*\*\* 人文科学研究室

が、体育の本質は失うものではなく、広義の意味において国民の健康や体力の向上に寄与し、社会生活を営む上に必要な心身の調和を

うながすものでなければならないと思われる。その意味で表3の、学校体育と社会体育の交流についてどう思いますか、に対する解答の1の87%は、体育教師が既述のことを積極的に支持するものと言えよう。だからといって、その対象や方法までもが学校体育と社会体育の区別なく捉えられるべきではないと思われる。

表 2 (Q13)

1. 地域のクラブ活動を通して行う体育運動	39.2%
2. 学校体育と地域体育の接点にクラブ活動がある	20.0
3. 今後、社会体育が学校体育をリードすべきである	28.5
4. 今後、学校体育が社会体育をリードすべきである	12.3

表 3 (Q8)

1. もっと交流すべきである	87.0%
2. 学校のスポーツクラブを通してのみ交流すべきである	9.2
3. 今のままでよい	0
4. 別に交流する必要はない	2.3
5. わからない	1.5

#### 8. クラブ観

表4は、クラブ活動(スポーツクラブ)について次の中から賛成と思われるものを選んで下さい。との問いに対する解答である。ここでは、クラブ活動を生徒のエネルギーの発散と考えている者が65.4%である。筆者が昭和48年1月に高校生200名を対象に、生徒から見た体育教師の調査結果(以下、高校生の調査とする)においても、ほぼ同じ傾向に出ている。特に高校生のその他の欄では、「やりたい者が勝手にやればよい」とか「関係がない」といったような無関心層がかなりいる。この生徒側のクラブ観の傾向から、体育教師

は単に生徒のエネルギー発散を考えるのみならず、生徒のクラブ観を捉えてクラブ活動の対策を積極的に打ち出すことが肝要であろう。また、クラブ活動は教師の負担が大きいとする者が14.6%と予想外に多かった。そこには、現場体育教師の過重勤務の問題が露呈されているようにも思われる。

次に、クラブ活動を学校体育、社会体育のいずれに属すると考えるかを質問してみた。その結果は表5の通りである。それによると、学校体育に入ると思う者が45.5%、その両方に入ると思う者が38.5%である。現在のクラブ活動は、小・中・高校のすべてに教育課程の一分野として位置づけられており、原則的には学校体育に属するものである。しかし、体育教師には両方に入ると思慮する傾向もかなりあり、現状のクラブ活動が社会体育的ファクターも混在した方向にあるとも言えるだろう。さらに、このことは次のことも意味すると思われる。すなわち、教育課程のクラブ活動は、ともすると教科延長に陥りやすく、しかも体育人に枠社会、あるいはタテ社会的傾向がうかがえることから、体育教師の必要以上のクラブ活動への介入も考えられる。しかし、本来クラブ活動は、生徒の共通の目的、興味などによる自主的、主体的要素が重要視されるべきであろう。そこには教科としての体育と離れた広義の社会的性格の育成の可能性もある。すなわち、体育の社会化という社会体育的意義も学校体育の中に含まれるものと考えられる。この意味において体育教師は、このようなクラブ活動のもつ内容を認識していることをうかがい知ることもできよう。しかしながら体育人の枠社会、あるいはタテ社会的傾向を考慮すると、表5からのクラブに対する体育教師の教育理念と現実指導とは必ずしも一致するものではない。

表 4 (Q6)

1. クラブ活動は中・高校生の教育という点で考えると必要がないので廃止した方が良い	0%
2. クラブ活動は教師の負担が大きいのので廃止した方が良い	0
3. 生徒のクラブ活動を欧米のように市や町のスポーツ・センターにまかせた方が良い	14.6
4. クラブ活動は生徒のエネルギーの発散の面などを考えると存続させた方が良い	65.4
5. その他	20.0

表 5 (Q11)

1. 学校体育に入ると思う	45.5%
2. 社会体育に入ると思う	5.5
3. 両方に入ると思う	38.5
4. どちらも言えない	10.5

## 9. 価値志向

我々が何かの事象に対して価値観を抱くということは、その一個人のパーソナリティを根底から変容させるほどに深遠な場合が多い。むしろ、パーソナリティを形成する枠組として、能力的、情意的、無意識的側面などがあるが、価値観の志向も重要なファクターとして、その中に含まれるものである。特にリースマンも指摘するように、他人志向タイプの増えつつある今日においてはなおさらのことであろう。

価値の定義については一様ではないが、一応見田宗介の定義が適切であろうと思われる。彼は、価値を「主体の欲求をみたす。客体の性能<sup>1)</sup>」としている。すなわち、主体である個人や社会集団が、客体である事物、行為、観念、思想体系などに対して望ましいとの価値判断をすることであるという。この定義の体験(価値的体験)は、自我の未成熟な時期には無理である。価値的体験を通して価値基準が形づくられ、価値意識として自我内部に体系化されうる可能性をもつのは、自我の分化が見られる青少年期以降である。このような価値概念をベースにして、表 6.7 を分析してみ

ることにする。ここでの価値調査は、オルポートとバノンがシュプランガーの価値体系をテスト化したものを参考にして作ったものである。

表 6 は、もしあなたが十分な能力を持っているとしたら、あなたは次のどの職業を選びたいと思いますか、との問いに対する解答である。

この表を見ると、かなり価値意識の分散していることがわかる。しかし、ある一定の枠組集団内では、いわゆる役割的性格の如く価値志向にも共通の傾向が存在すると考えられる。この表も分散している中に一つの傾向がうかがえる。ここでは実業家が 25.3% と少し高いパーセンテージを示し、社会事業家の 15.4%、芸術家の 14.6% がそれに続いている。そこには大別して三つのことが推察できそうである。一番目は、体育教師は実際的な思考体系でもって努力するタイプであるというイメージが浮んでくる。高校生の体育教師のイメージ調査によると、「体育教師は一般に努力型だが、融通性に乏しく堅い」イメージをもつ傾向にある。このことは先程のイメージを支持するとも言えるのではなからうか。また、実業家がトップなのは他の人々にも見られる傾向だが、体育教師を分析する場合は少し異なる意味が含まれると思われる。すなわち、その価値志向傾向を社会に対する積極的態度と考えると、体育の意義でもある公正、協力、責任などが確立されている所以であるとも言える。しかし反面、実業家は資本主義

表 6 (Q16)

1. 実 業 家	25.3 %
2. 政 治 家	6.9
3. 芸 術 家	14.6
4. 学 者	12.3
5. 芸 能 人	3.9
6. 役 人	5.4
7. 宗 教 家	2.3
8. 社会事業家	15.4
9. 職業運動家	13.9

社会においては、しばしば自分の支配下に一般の人々を置き、権力、利益のみに固執する傾向にあることも考えられる。この点は今後にも充分検討されるべきものだと思う。高校生の調査の中にも、「自己本位」、「運動ができるからといって威張るな」などと言う声がある。ここにもタテ社会的体質がうかがえる。二番目は、他人に尽したり共感し合うことを大切にするタイプのイメージである。これも高校生の調査の中において、「恐いが、付き合いやすく話しやすい」教師と見る傾向である。恐いイメージは、体育教師が指導中において、ともすれば懸命になりがちなことや、タテ社会的気質が反映されたものとも考えることができる。

三番目は、比較的女性的で学生らしいイメージが浮んでくるということである。なぜならば、実業家以外では芸術家や社会事業家などの価値志向は、女性や中・高校生に多く見られる傾向にあるからである。もちろん体育教師の価値志向が、女性のそれと比較的似ているということのみで性急な解釈をするのは危険であろう。しかし、筆者の昭和47年実施のスポーツマンの性格特性の資料によれば、ロールシャッハやTATなどの検査結果から、男子スポーツマンは親切で気がやさしく、依存的、退行的傾向をもちやすいことが示唆さ

れている。これらのパーソナリティ特性からの価値志向も、他の男性に比して女性的価値志向をもつ可能性は充分あると考えることもできる。

表7は、人は何を基準として行動すべきと思いますか、という問いの解答である。表6に比べると言葉が少し抽象的であり、そのイメージもぼんやりしてくる傾向にある。しかし、その一個人の行動パターンに大きな影響を及ぼす重大な概念である。

表 7 (Q17)

1. 信 仰	3.8 %
2. 美	3.1
3. 富	3.1
4. 真 理	41.5
5. 愛	8.5
6. 体 力	3.8
7. 家 名	0.8
8. 家 庭	3.1
9. 国 家	1.5
10. 道 徳	30.0
11. 地 位	0.8

ここでは、真理と道徳が比較的高いパーセンテージを示している。一般に、真理とか愛というのは普遍的行動基準となっている場合が多い傾向にあるものだが、体育教師においては8.5%と低いのは興味をもたれる。高校生及び大学生(体育専攻学生)の調査では、愛の選択される傾向が極めて高いのに対し、愛という価値イメージは体育教師の場合、真理や道徳などに比してあまり普遍的意味をもたないということだろうか。このことは、その個人にとってある程度の普遍的価値イメージでさえも、かなりの変化が見られるという可能性を含んでいる。そして体育教師の場合、愛というイメージがそれに当たるということを示唆するものかもしれない。体力については、

3.8%と予想外に低い。体育教師は、体力には比較的恵まれているので、価値規範には含まれないのだろうか。（それを支持するデータがある。それによると40～50代の男性は体力を選択する割合が体育教師よりもかなり多くなっている）。しかし、体力は重要な価値をもっている。一般には体力を、生命維持のための自然的、社会的環境からの抵抗力と人間が実際に行動するのに必要な行動力とに分けて考えている。しかし、さらに筆者なりに定義するならば、およそ次のようになる。すなわち「体力は、自然的、社会的環境において、精神的活動と社会的活動のコミットメントを形成し、日常の我々の人間活動のメカニズムを発達させるもの」であると。ここでの人間活動とは、思考、創造、意志、学習などの人間行動の基本的なものをいう。その意味において、体力向上の促進が一つの体育教師の責務である以上、今一度体力を価値基準として促える積極的態度も必要であろうと思われる。

#### 10. スポーツと政治

スポーツと政治に関しては、過去、現在を問わず種々の形でクローズアップされている。例えば、ナチス・ドイツ軍を率いる独裁者ヒットラーのスポーツによる気力や勇気の養成、ミュンヘンオリンピックでのアラブゲリラ事件などもその一部である。そこで、ここでは体育教師に二つの質問を施行してみた。表8は、政治とスポーツについてあなたはどのようにお考えですか、との問いに対する解答で、表9は、ミュンヘンオリンピックでアラブゲリラに殺されたイスラエル選手の追悼式に日本選手が参加しませんでした、このことについてどう思われますか、との問いに対する解答である。

表8では、59.2%の者がスポーツと政治を切りはなした方がよいと考えている。また表

表 8 (Q9)

1. スポーツと政治は切りはなした方がよいと思う。	59.2%
2. スポーツに政治が入るのはやむをえないと思う	16.9
3. どちらとも言えない	12.4
4. わからない	3.8
5. その他	7.7

表 9 (Q10)

1. 参加すべきだ	47.7%
2. 各選手個人に判断をまかせるべきだ	41.6
3. 参加しない方がよい	1.5
4. どちらとも言えない	4.6
5. わからない	3.1
6. その他	1.5

9では、参加すべきだと答えた者が47.7%である。この二つのパーセンテージは一見矛盾しているかのようだが、表9の結果を、スポーツマン精神は国を越えて共通に存在するものであり、同胞として参加すべきだという意味に解釈するとより妥当になる。そこには、政治を超越した高度のスポーツマン精神が浮き彫りにされている。しかし、スポーツと政治を現実には切りはなして、スポーツあるいはスポーツマン精神を考えることが本当に可能なのであろうか。今日、スポーツを楽しむ遂行するためには、施設や管理、予算問題などの対策に関連をもたないわけにはいかない。しかも、スポーツ振興法第三条の施策の方針で、「国及び地方公共団体は、スポーツ振興に関する施策の実施に当たっては、国民の間において行なわれる、云々」と定められていることからわかる如く、スポーツと政治を離して考えることは不可能のように思われる。また、その行政機構の中心である体育局は、文部省に属していることから自明である。スポーツと政治の理念として、磯村英一は

人間の一人一人が社会的存在である限り政治体制に対立できないとして、次の五つの理念をあげている。<sup>2)</sup>それらは、役割的転換の理念 (role-change theory), 階層的移動の理念 (stratification mobility theory), 集団的秩序の理念 (mass order theory), 国際的親善の理念 (international friendship theory), 人間的平等の理念 (human equality theory) である。このように、スポーツと政治を単に切りはなすのではなく、磯村も指摘する如く、現実の政治体制に対して、自主的、主体的にスポーツの理念を樹立させる態度が大切なことであろうと思われる。この意味で、体育教師のスポーツと政治に対する考え方は、時として現実と理想の分離する危険をもっているのではなからうか。このことは今後問題を残すものであろう。

#### 11. 体育教師の当面する問題

表 10 (Q 24)

1. 教師仲間で感情的になりがちである	10.0%
2. 仕事のわりに収入が少ない	20.0
3. 血縁や学閥が重くみられている	15.4
4. 仕事の能力や実績が重くみられている	9.2
5. 上司の子女のみが入りがちである	10.8
6. 組合などの政治的なことで対立することが多い。	19.2
7. 特に問題はない。	11.6
8. その他	3.8

この表はあなたの職場でいちばん問題があると思えば、どれだと思いますか、という問いに対する解答である。特に問題はないと答えた者が全体の一割強であることは明確であるか否かは別として多くの教師が何らかの疑問、不満、解決課題を有していることを表わしている。その中で一番問題とされているの

は収入の問題である。中学校、高等学校を問わず、教員の給与の低いことは民間企業と比較すると一見して理解できることであるが、これは体育教師だけが問題としているのではなく、他の教科の教師も同様であると思われるし、社会一般の判断でもある。次に問題とされているのは政治的問題である。承知の通り、公立学校の場合、そのほとんどが日本の最大の圧力団体の一つである日教組の組合員である。従って、各学校における組合活動は基本的に日教組の路線を前提として展開されるので、組合組織と個人という形式をとって対立しやすくなるといわれる。それは、日教組自体が官僚制化され、高度に組織化されているために、各単位組合の動向を十分に反映せずに独自の展開をしてゆく可能性が強いためである。そして、さらに特に官僚化された政治集団においてよくみられるのであるが、メンバーが積極的に参加するものと、参加せず、無関心である者がでてきて、いわゆる社会的緊張を生じるが、この現象が19.2%の解答の一要因ではなからうか。一党一派の意志決定を各組合の内部で積極的に参加するメンバーに導入されるときには、参加せず、無関心なメンバーとの間に個人的な対立、緊張が生じるが、今日の教員組合においてはこの可能性が大であるからなおさらのことである。次に多いのが血縁や学閥が重くみられることに対する不満である。この種の不満のパーセンテージは択一式の方法をとらなければかなり高くなるであろう。血縁が重くみられるということは、すくなくとも組織の構造、意志決定、勢力構造が前近代的状況にあることを示している。血縁に連なることのできない者は常に不満をもつことになる可能性が多い。この傾向は特に私立学校に多くみられるが、これは体育教師のみが不満としているわけではない。これに対して、学閥に関して体育教師がもつ不満はかなり多いと思われる。つま

り、今日の教員の多くは旧師範学校、学芸学部、教育学部出身者であり、それぞれの出身学校の者が各勤務校で何人かおり、いわゆる「イン・グループ」を形成して、しばしば意志決定過程、勢力構造において大きな力を発揮している。これに対して、日体大出身者はたしかに全国の体育教師のなかで占める割合はきわめて高い。が、しかし、各学校においては、通常一人ないしは二人であって、各学校ではマイノリティーである。そのため、ディンジョンメーカーとしての地位につくことはきわめて困難であり、ついたとしても、特に限定された部分に限られることになりやすい。この点が学閥に対する不満となる点である。こうした状況をかかえこんでいるために、教師仲間で感情的になりやすいという10.0%を生じる結果になるのである。

こうした体育教師のかかえこんでいる状況は次のような方向に体育教師を方向づけているようである。即ち、次の表で明らかである。

表 11 (Q28)

1. 教科も学校も今のままでよい。	40.8%
2. 学校は同じで教科を変えたい	6.2
3. 教科は同じで学校を変えたい	29.2
4. 教師以外の職に変わりたい	1.5
5. 自分で事業、商売をはじめたい	12.3
6. その他	10.0

今の教えている教科や学校を、これからもかえないでやっていきたいと思いますか、という問いに対する解答がこの表である。教科も学校も今のままでよいという解答が四割強もあることは一見体育教師が職場で問題を感じていないようにみえるが、実は多くの問題をかかえていながら、それらの問題を生徒との接触を通じて解消しているので、このような形で解答されてくるのである。この点につ

いては先号で明らかにされている。教科は同じで学校をかかわりたいと解答する者が3割弱いる。この人々は学校内部で様々な問題にぶつかるが、教科そのものには問題にぶつかることの少ない人々であろう。自分で事業、商売をはじめたい人々が1割強いるが、この人々は教科に問題を感じなくても、他の多くの部分に問題があるために教師それ自体に意味づけをすることが不可能となり、そこから他の世界に自己を移そうとする人々であろう。一割強の人々ではあるがこの人々の存在は見逃がすことの出来ない人々である。

以上のように体育教師は学校で多くの問題をかかえこんでいるが、それは先に述べたような状況に加えてしばしば指摘されるように、体育教師が他の教科の教師とくらべてポジティブにもネガティブにも機能するのであるが、前近代的意識、身分意識が特定状況の下で強くあらわれることによるものと思われる。こうした意識や問題意識のずれ等は、体育教師のパーソナリティ上の問題もあるが、それ以前に体育大学それ自身の機構や組織の側にもなんらかの問題があるものと思われる。

## 12 体育教師の使命

理想的体育教師とは如何なるものであろうか。それは各個人独自の自由な教育理念に終始するのみならず、そこには一般的法則性が見出されていなければならない。その一般的法則性とは、次の三段階に大別して考えられる。第一は、被教育者の要求水準、興味、能力などの把握と、被教育者の心身の発達段階を、生理学的、身体運動学的、心理学的、社会学的などの側面から捉えること。第二は、それらによって被教育者自身の自我の確立を促すこと。すなわち、主体我、客体我の識別と統合、及び社会生活に重要な「…としての自分」を促進させること（自我同一性）。第三には、体育教師自身の知的能力、運動技能、

教育指導技能などの養成を図ること。特に第三は、第一、第二をも包含する最も大切なファクターである。他教科教師に対しても言及されなければならないことだが、教師の安定ある豊かなパーソナリティが身につけていないければ、そもそも教育なるものが根底から破壊されたも同然である。しかし、今日の体育教師は、これらの一般的法則性が身につけていない現状にある。特に、体育教師の教養や知性の低さなどが指摘される風潮ある昨今、とても豊かなパーソナリティは浮き彫りにされないように思われる。しかも、体育教師になったのは、運動が好きだからという単純且つ明解な答えによることも原因の一つになっているのではなからうか(本学紀要第三号参照)。このことは、体育教師に対して一つの問題提起となっている。すなわち、高度の運動技術はもっていても、既述の教育理念が伴わない傾向にあるので、偏重的教育に陥る危険があるということである。体育教師は、今後このことを認識した上で、教育の理念と実践に貢献することが重要であろうと思われる。

注

- (1) 見田宗介 「価値意識の理論」弘文堂 1973, P14~P24
- (2) 竹之下、磯村編 「スポーツ科学講座」10, スポーツの社会学, 大修館 1965, P287~P289

参 考 文 献

- (1) 間藤侑 「大学運動部をモデルとした粹社会的体質に関する心理学的研究」 日本体育大学紀要1-1 1971
- (2) 中根千枝 「タテ社会の人間関係」講談社 1968
- (3) 見田宗介 「現代日本の精神構造」弘文堂 1973
- (4) 鮑戸 弘 「イメージの心理学」 潮新書 1970
- (5) シュプランガー・伊勢田曜子訳 「文化と性格の諸類型」I・II巻, 明治図書 1967



Question (回答は一つえらんで○印をつけて下さい)

1. 体育という言葉から、どういうことを考えますか。
  1. 教育の1つ 2. スポーツ 3. 社会体育 4. 競技 5. 健康
2. スポーツとは何かと聞かれたらどう答えますか。
  1. 教育の手段 2. 競技 3. 遊び 4. レジャー 5. クラブ活動
3. レジャーとはどういうものとお考えですか。
  1. 余暇 2. レクリエーション 3. 遊び 4. 労働 5. 趣味
4. プレイ(play)という言葉から何を想像されますか。
  1. 遊び 2. スポーツ 3. 態度 4. レジャー 5. サークル活動
5. 学校体育についての考えを次の中から賛成と思われるものを一つ選んで下さい。
  1. 学校体育は生徒の体をきたえるためのものだから、サッカー、体操などの運動に重点をおくべきだと思う。
  2. 学校体育は生徒のスポーツ技術向上に重きをおくべきだと思う
  3. 学校体育ではスポーツのプレイを教育の手段としてのみを考えるべきだと思う。
  4. 学校体育ではスポーツを理論的・科学的に教えるだけで良く、実際のプレイは市や町のスポーツクラブでした方が良くと思う
  5. その他 ( )
6. クラブ活動(スポーツクラブ)について次の中から賛成と思われるものを一つ選んで下さい。
  1. クラブ活動は中・高校生の教育という点で考えると必要がないので廃止した方が良く
  2. クラブ活動は教師の負担が大きいのので廃止した方が良く
  3. 生徒のクラブ活動を欧米のように市や町のスポーツ・センターにまかせた方が良く
  4. クラブ活動は生徒のエネルギーの発散の面などを考えると存続させた方が良く
  5. その他 ( )
7. 各地域にスイミングクラブ、柔道場などの民間のスポーツ・センターが増えてきていますが、中・高校生の教育という点からみてどう思いますか。
  1. もっと増やした方がよい 2. 今のままの数でよい 3. 減らした方がよい
  4. ない方がよい 5. わからない
  6. その他 ( )
8. 学校教育と社会体育の交流についてどう思いますか。
  1. もっと交流すべきである。
  2. 学校のスポーツクラブを通してのみ交流すべきである。
  3. 今のままでよい
  4. 別に交流する必要はない
  5. わからない
9. ミュンヘン・オリンピックでは政治とスポーツについて問題になりましたが、政治とスポーツについてあなたはどのようにお考えですか。
  1. スポーツと政治は切りはなした方がよいと思う

## 現代社会における体育教師の生活意識(Ⅱ)

2. スポーツに政治が入るのはやむをえないと思う
3. どちらとも言えない
4. わからない
5. その他 ( )
10. ミュンヘン・オリンピックでアラブゲリラに殺されたイスラエル選手の追悼式に日本選手が参加しませんでした。このことについてどう思われますか (一つえらんで下さい)
  1. 参加すべきだ
  2. 各選手個人に判断をまかせるべきだ
  3. 参加しない方がよい
  4. どちらともいえない
  5. わからない
  6. その他 ( )
11. クラブ活動 (スポーツクラブ) は学校体育に入ると思いますが、それとも社会体育に入ると思いませんか。
  1. 学校体育に入と思う
  2. 社会体育に入と思う
  3. 両方に入と思う
  4. どちらとも言えない
12. あなたはアマチュアリズムについてどうお考えですか。
  1. 将来もアマチュアリズムを徹底すべきだ
  2. 大衆化に伴ってアマチュアリズムは徹底できない
  3. プロ、アマの交流を深めるべきだ
  4. オリンピック精神は理想の旗じるしにすぎない
13. 社会体育についてあなたはどうお考えですか。
  1. 地域のクラブ活動を通して行う体育運動
  2. 学校体育と地域体育の接点にクラブ活動はある
  3. 今後、社会体育が学校体育をリードすべきである
  4. 今後、学校体育が社会体育をリードすべきである
14. 体育学・生理学についてどうお考えですか。
  1. 体育学は身体運動を通しての教育学である
  2. 体育学は身体生理学をも含む
  3. 生理学は体育学、身体運動学をも含む
  4. 体育学は教育、生理学の接点にある
15. 健康についてあなたはどうお考えですか。
  1. 健全なる精神は健全なる身体に宿る
  2. 精神と肉体は切り離して考えるべきだ
  3. 体育学は国民の健康水準の向上をはかる
  4. 健康水準は国民の自由な自発性にまっべきだ
16. もしあなたが十分な能力を持っているとしたら、あなたは次のどの職業を選びたいと思いますか。
  1. 実業家
  2. 政治家
  3. 芸術家
  4. 学者
  5. 芸能人
  6. 役人
  7. 宗教家
  8. 社会事業家
  9. 職業運動
17. 人は何を基準として行動すべきだと思いますか。
  1. 信仰
  2. 美
  3. 富
  4. 真理
  5. 愛
  6. 体力
  7. 家名
  8. 家庭
  9. 国家
  10. 道徳
  11. 地位
18. あなたは自分の生活の中で、仕事と趣味などの仕事以外の生活と、どちらに生きがいを感じますか。

感じていますか。

1. 仕事の方に生きがいを感じている
2. どちらかといえば、仕事の方に生きがいを感じている
3. どちらも同じくらい生きがいを感じている
4. どちらかといえば、仕事以外の生活の方に生きがいを感じている
5. 仕事以外の生活の方に生きがいを感じていない
6. どちらにも生きがいを感じていない
7. わからない

19. 現在の職業は希望通のものですか。

1. はい
2. いいえ

SQ (いいてと答えた方へ) どんな職業を希望していましたか。

1. 会社員
2. 役人
3. 学者
4. 職業運動家
5. 実業家
6. 社会運動家
7. 自由業
8. その他( )

20. 今のお仕事は別として、あなたはどのような仕事が理想的だと思いますか。

1. 高い収入が得られる仕事
2. 失業のおそれがない仕事
3. 働く時間が短い仕事
4. 社会的評価が高い仕事
5. 自分の能力が思いきり発揮できる仕事
6. 世の中のためになる仕事
7. 職場で楽しくすごせる仕事
8. わからない
9. その他( )

21. 仕事について次のような考え方があります。あなたのお考えに近いのはどれですか。

1. 仕事は生活の中で、いちばん大きな生きがいだ
2. 人間として生まれた以上、仕事をするのは人間のつとめだ
3. 仕事をするのは、結局のところ生活をしていくためにやむを得ないことだ
4. わからない

22. あなたは毎日やっているお仕事に、やりがいを感じていますか。

1. かなり強く感じている
2. ある程度感じている
3. あまり感じていない
4. ほとんど感じていない
5. わからない

23. (前問で感じている人に) あなたはどういうことにやりがいを感じて、毎日仕事をしているのですか。

1. 収入が安定していること
2. 家族や子どもの成長の楽しみ
3. 生徒の将来が楽しみ
4. 自分の将来が楽しみ
5. 教える(又は学ぶ)ことの楽しみ
6. 自分に適した仕事をやっていること
7. 仕事のなかで自分の能力を発揮できること
8. 世の中に役にたっていること
9. その他( )

24. あなたの職場でいちばん問題があるとすれば、どれだと思いますか。

1. 教師仲間で感情的になりがちである
2. 仕事のわりに収入が少ない
3. 血縁や学閥が重くみられている
4. 仕事の能力や実績が重くみられている
5. 上司の子どものみが入りがちである
6. 組合などの政治的な問題で対立することが多い
7. 特に問題はない
8. その他( )

現代社会における体育教師の生活意識(Ⅱ)

25. あなたは、いろいろな能力をお持ちだと思いますが、その中で、どれがいちばん高く買ってもらえる能力だと思いますか。
1. 肉体労働に耐えられる体力
  2. 手先が器用なこと
  3. 手早く仕事を仕上げる能力
  4. 地味な仕事をコツコツやりとげる能力
  5. 先を見通して物事を計画的にはこぶ能力
  6. 新しい考えを思いつく能力
  7. 人を説得し指導する能力
  8. 上手に人と接する能力
  9. 特になし
  10. その他 ( )
  11. わからない
26. (前問で能力をあげた人)
1. かなり生かされている
  2. ある程度生かされている
  3. あまり生かされていない
  4. ほとんど生かされていない
  5. わからない
27. 現在のあなたの能力は別にして、これからの日本で特に高く評価される能力は何だと思いますか。
1. 肉体労働に耐えられる能力
  2. 手先が器用なこと
  3. 手早く仕事を仕上げる能力
  4. 地味な仕事をコツコツやりとげる能力
  5. 先を見通して物事を計画的にはこぶ能力
  6. 新しい考えを思いつく能力
  7. 人を説得し指導する能力
  8. 上手に人と接する能力
  9. 特になく
  10. その他 ( )
  11. わからない
28. あなたは、今の教えている教科や学校を、これからもかえないでやっていきたいと思えますか。それともかわりたいと思えますか。
1. 教科も学校も今のままでよい
  2. 学校は同じで教科をかわりたい
  3. 教科は同じで学校をかわりたい
  4. 教師以外の職にかわりたい
  5. 自分で事業・商売をはじめたい
  6. その他 ( )
29. ところで、大学の後輩に、あなたの今の職につくことをすすめますか。
1. すすめる
  2. すすめない
  3. わからない
30. あなたの子ども(子どものない人は将来できたとき)についてはどうですか。
1. すすめる
  2. すすめない
  3. わからない
31. あなたは体育大学に入る際、反対がありましたか。
1. 有る
  2. 無い
32. 有ると答えた方は、どういう理由ですか。
1. 長男(女)、一人娘で後継ぎのため
  2. 経済的な面で
  3. 将来性の点で
  4. その他 ( )
33. 無いと答えた方は、どういう理由ですか。
1. 親が体育関係者であったから
  2. 家族が体育に理解があったから
  3. 家族が入学に無関心であったから
  4. その他 ( )
34. 日体大を選んだ理由。
1. 有名大学だから
  2. 勧誘があったから
  3. 日体大がうかったから

4. なんとなく 5. その他 ( )
35. 日体大をどのようにして知りましたか。  
1. 先生 2. 親 3. 先輩  
4. マスコミ 5. その他 ( )
36. 入学に際し、勧誘がありましたか。  
1. 有る 2. 無い
37. 有ると答えた方は、どなたからですか。  
1. 大学 2. 高校の教師 3. 親  
4. 先輩 5. その他 ( )
38. 日体大に入学した大きな理由は次のどれですか。  
1. 自分の特技を生かしたかった 2. 有名選手にあこがれて  
3. 体育教師になりたいくて 4. 新しい環境を求めて  
5. その他 ( )
39. 在学中どのような職業につきたいと思いましたか。  
1. 体育教師 2. 社会体育指導者 3. 体育関係以外
40. 現在、体育教師をされている方にお聞きますが、教師の職に魅力を感じますか。  
1. 感じる 2. 感じない
41. 感じると答えた方はどのような理由によりますか。  
1. 生徒とのふれあい 2. 体育が続けられるから 3. 職業として安定性がある  
4. 指導者になりたいくて 5. その他 ( )
42. 在学中に受けた講義は現在役立っていますか。  
1. 役立っている 2. 役立っていない
43. 体育関係外に就職している方にお聞きますが、現在の職業は次のどれにあたりますか。  
1. 第1次産業 2. 第2次産業 3. 第3次産業
44. 勤続年数は何年ですか。 ( ) 年
45. 現在の職業は在学当時の希望でしたか。  
1. 希望であった 2. 希望でなかった
46. どのような気持で入社しましたか。  
1. 不安だった 2. やや不安だった 3. 不安を感じなかった
47. 不安とお答えになった方はどのような理由によりますか。  
1. 専門分野と異なるため 2. 希望の職でないため 3. その他 ( )
48. 現在の職に満足していますか。  
1. 満足している 2. 満足していない
49. 満足していない人は、どのような理由ですか。  
1. 単調で変化がない 2. 給料が少ない 3. 人間関係がうまくない  
4. 適職でない 5. 自分の能力に疑問をもつ
50. その不満をどのようにして解消していますか。  
1. スポーツ 2. 娯楽、レジャー 3. 趣味 4. その他 ( )
51. 転職したことがありますか。

現代社会における体育教師の生活意識(Ⅱ)

1. ない    2. 1回ある    3. 2回～4回ある    4. 5回～7回ある

最後に、あなた自身のことについておたずねします。よろしくお答え下さい。

1. 性別

1. 男    2. 女

2. 年齢

1. 20～24歳    2. 25～29歳    3. 30～34歳    4. 35～39歳  
5. 40～44歳    6. 45～49歳    7. 50～54歳    8. 55歳以上

3. 同居の家族数（本人を含む）

1. 1人    2. 2人    3. 3人    4. 4人  
5. 5人    6. 6人    7. 7人    8. 8人以上

4. あなたのご出身地

(            ) 県

5. 勤務先の府県名

(            ) 県

6. おたくの生活程度は下のようにわけるとしたら、どれになると思いますか。

1. 上    2. 中の上    3. 中    4. 中の下    5. 下

7. 実家では何をされていますか。

1. 農家    2. 教師    3. 役人    4. 商売    5. 会社員  
6. 社会事業家    7. 政治家    8. 自由業    9. 無職    10. その他 (            )

8. 1カ月の収入（ボーナス・臨時収入などを含めて下さい）。

1. 2万円未満    2. 2～4万円未満    3. 4～6万円未満  
4. 6～8万円未満    5. 8～10万円未満    6. 10～12万円未満  
7. 12～14万円未満    8. 14～16万円未満    9. 16～18万円未満  
10. 18～20万円未満    11. 20万円以上

次の所には、日体大への要望、或は教育に対する意見などがありましたら、どうぞ御自由にお書き下さい。

千原英之進・片山 昇・新屋重彦

LIFE CONSCIOUSNESS OF TEACHERS OF  
PHYSICAL EDUCATION IN THE CONTEMPORARY SOCIETY

by

Einoshin Chihara, Shigehiko Araya and Noboru Katayama

In this study we made an analysis on the following aspects from the psychological point of view.

1. A view on physical education in schools and in the community.
2. A view of athletic clubs.
3. Value orientation.
4. Sports in relation to politics.
5. Questions at present as a teacher of physical education.
6. Duties as a teacher of physical education.

We found that teachers of physical education have not higher social and political orientations than white-collars and teachers of the other fields of education. It was also shown that they confront many difficulties in their work groups.